

戦争末期の外国人労働者

本土決戦体勢に入り、重要性を増した新潟港では、石炭・鉱石などの荷揚げ作業等に多くの日本人が働いていたが、戦地に男手をとられ、日本人だけでは労働力が足りなかった。こうした状況で労働力の不足を補ったのは、強制的に日本につれてこられた中国人や朝鮮人、捕虜となった欧米人兵士であった。

強制労働は、主に日本鋼管新潟製鋼所、新潟鉄工所入船工場、新潟海陸運送などを仕事場として行われ、昭和20年の時点で朝鮮人は約670人、中国人は約900人、欧米人兵士は約790人だった。

彼らは厳しい労働を課せられ、粗末な宿舎に寝泊りし、満足な食事を与えられることはなかった。

新潟市の戦争資料紹介



- ㊤ 知事布告複製
- ㊦ 戦時下の新潟

新潟市歴史博物館みなとびあ

常設展示において太平洋戦争時の新潟市の様子についても、左の写真のように、国民服や防空頭巾、千人針、陶製湯たんぽ、空襲警報発令掲示板、疎開を命じる知事布告などを展示し、当時の事象を紹介しています。

総務省のホームページ

全国の都市の戦争の記録が紹介されており、新潟市も掲載されています。
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/daijinkanbou/sensai/

- ㊧ 「市民が伝える平和へのメッセージ」
- ㊨ 「新潟市歴史双書2 戦場としての新潟」

「市民が伝える平和へのメッセージ」は新潟市が平和祈念碑の建設を記念して、市民の方々から戦争体験談や平和へのメッセージを募集し、とりまとめたものです。8月10日の戦禍についての体験談も掲載されています。

「新潟市歴史双書2 戦場としての新潟」は新潟市の歴史を個別のテーマごとに紹介するシリーズの第2巻で、戦争がテーマです。

上記2冊及び1ページで紹介した「戦争とわたくし - 市民の戦争体験記 -」は、市内図書館でご覧いただけます。

新潟市総務部総務課

電話：025（226）2409

ここに記載の内容は「新潟市歴史双書2

FAX：025（228）5500

戦場としての新潟」を参考にしました。 Email: somu@city.niigata.lg.jp

戦争と新潟市

参考資料：新潟歴史双書2 戦場としての新潟

65年間の恐怖「北区で不発弾発掘」

平成22年12月5日、新潟市北区川前で第2次世界大戦中に米軍が投下したと見られる不発弾（機雷）の撤去作業が陸上自衛隊の手によって行われた。

不発弾（機雷）が見つかったのは住宅の建設予定地で、8月に行われた磁気探査により、地下約6メートルの地点に不発弾の疑いがあることが判明していた。11月24日の自衛隊による手掘り作業によって不発弾が確認され、以降市と警察による24時間体制の現地警備が続いていた。

不発弾（機雷）は、長さ約2.1メートル、直径約5.8センチ、重さ約835キロで、撤去作業は午前9時から約50分間行われた。陸上自衛隊の隊員が不発弾（機雷）の信管を抜き、クレーンで運び出し、無事に終了した。

この作業のために半径300メートルが立ち入り禁止となり、付近に住む約300世帯、1,000人以上が一時避難した。



北区市民が見た機雷投下

川前に機雷が落とされたこと

昭和20年5月24日か25日の夜、9時を過ぎていたと思いますが、家の前の県道で立っていたところ、「ゴーゴー」と飛行機の爆音とも似つかぬ音がしたかと思うつかの間、「どぼっ」と、大きな物体が地面に突き刺さり、一瞬道路がぐらっとゆれました。アメリカ軍の機雷が落ちたのでした。

恐ろしさに震えながらも田圃を見ましたら、泥の土が盛り上がり、あたり一面に泥が飛び散ってひどいものでしたが、爆発しませんでした。しばらくすると生きていた喜びが湧いてきました。機雷は直径0.5メートル、長さ1.8メートルぐらいでした。

翌日から、陸軍と海軍の兵隊が十名ほどで爆破作業に当たり、付近の住民は5～600メートル離れた地域に避難し、かたずをのんで爆破されるのを待っていました。しかし、爆破作業は不発に終わり、もう爆破はしないということで機雷は地下に埋められました。（旧豊栄市発行「戦争とわたくし - 市民の戦争体験記 -」山田さんの体験記より要約）

空襲と知事布告

月日	県内滞空時刻	機数	内容(投下機雷数)
4.13	9:35~10:05	1	通過
4.22	朝	1	航空写真撮影
5.14	0:20~1:15	4	機雷投下(43)
5.25	0:30~2:30	4	機雷投下(63)
5.25	8:00~不明	1	航空写真撮影
5.27	0:30~1:40	約10	機雷投下
6.14	0:40~1:30	12	機雷投下(144)
6.14	1:45~不明	1	通過
6.20	0:10~3:00	8	機雷投下(96)
6.24	0:10~1:25	9	機雷投下(108)
6.28	0:30~1:37	7	機雷投下(84)
7.3	1:05~不明	2	通過
7.4	1:43~2:10	1	通過
7.10	0:20~1:17	9	機雷投下(87)
7.16	0:07~不明	2	機雷投下(59)
7.17	10:30~11:30	▲約10	銃爆撃
7.20	0:45~不明	5	機雷投下(45)
7.24	10:35~11:25	1	通過
7.28	0:00~不明	6	機雷投下(52)
7.28	2:25~不明	3	通過
7.29	10:48~不明	1	通過
7.31	20:45~22:30	3	通過
8.1	夜	2	機雷投下
8.2	11:59~不明	1	通過
8.4	12:12~13:10	1	ビラ散布
8.7	11:30~不明	1	通過
8.9	6:11~不明	▲6	不明
8.10	11:45~不明	▲16	銃爆撃
8.14	22:00~不明	不明	通過
8.15	6:50~不明	1	ビラ散布

新潟県の上空にB29が初めて姿を見せたのは、昭和20年4月13日のことだった。爆弾などは落とさなかったが市民に与えた心理的な影響は大きく、本土攻撃が激しくなって新潟も空襲されると、多くの人が思った。

5月14日の午前0時20分にはB29が4機新潟港に43個の機雷を投下していった。これに対する空襲警報が発令されたが、新潟市民は夜間空襲に不慣れで、特に灯火管制が不徹底であり、市内では電灯が漏れていたりした。

新潟市域にB29が飛来するようになった5月から、新潟県は新潟市が空襲されるのは避けられないとして、火災の広がりを防ぐために、事前の建物取り壊しを始めた。

8月1日、長岡市がB29による大空襲を受け、市街地の約80パーセントを消失した。そのため新潟県は8月6日、新潟、高田、柏崎、三条の4市とこれに隣接する町村を対象に大規模な建物と人の疎開に取り掛かった。

8月10日には、16機の米軍艦載機による市内各所への銃爆撃があり、貨物船等の船舶が銃撃を受け、多くの人が亡くなった。この日は新潟市で最も戦禍が激しく死亡者は判明しているだけで47人に上った。

8月6日には広島に、9日には長崎に原子爆弾が投下された。新潟県知事は緊急会議を開き、11日に新潟市民の緊急疎開を定める「知事布告」が公表された。しかし、実際には前日の10日から市民の間に「知事布告」のうわさが流れ、ほとんどの人が疎開していった。

新潟市への米軍機の飛来

機数の 艦載機、その他はB29

原子爆弾の標的だった新潟

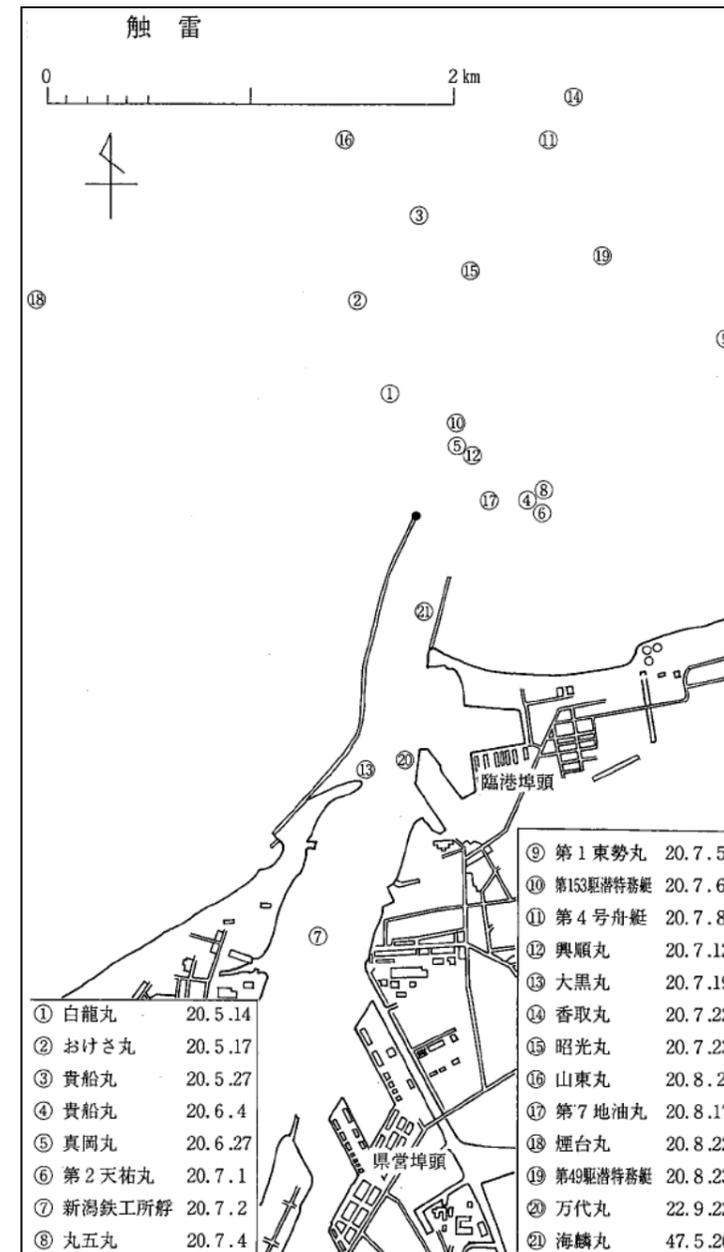
新潟市は、早い段階から原爆の投下目標候補地に上がっていた。そのため焼夷弾による空襲を受けなかった。そして、7月25日に原爆投下の目標の一つに確定した(下記参照)。しかし、その後、新潟市は工業地域と居住地域とが互いに遠く離れているため、原爆投下に不適当とされ、目標から外されていった。

アメリカ陸軍戦略航空軍司令官 カール・スパーツ将軍あて 1945年7月25日

1. 第20航空軍第509混成部隊は、1945年8月3日ごろ以降、目視による爆撃が可能な天候になり次第速やかに、次の目標、広島・小倉・新潟・長崎の一つに最初の特殊爆弾を投下せよ。陸軍省より派遣された軍人及び民間化学者が爆発効果の観測及び記録に従事するために、爆弾投下機に観測機を随伴させよ。観測機は爆発地点から数マイルの距離においてとどまれ。(中略)

参謀総長代理 トーマス・T・ハンディ

米軍機の機雷投下と触雷した船舶



新潟港の主な触雷地点

昭和19年7月にサイパン島が米軍に占領され、太平洋側の海上輸送が危険になると、政府は北海道・樺太(サハリン)から京浜地帯への石炭輸送を日本海側で陸揚げして、そこから鉄道輸送することとし、新潟港の石炭荷揚げ力増強の指令を出した。

昭和20年、硫黄島、沖縄が陥落すると米軍による本土の機雷封鎖が始まった。日本の船舶が航行できる水域は日本海側に狭まっていき、大陸資源を本土へ運ぶルートは北朝鮮の港から日本海側の諸港に運ぶルートしか残されておらず、新潟港の重要性は増していった。

昭和20年に新潟港を封鎖するために投下された機雷は、分かっているだけで781個に上る。新潟港に出入りする多くの船が触雷して損害を受けた。初めて機雷が投下された5月14日に、大阪商船の貨客船「白龍丸」(3182トン)が、触雷して小破したのが最初の被害だった。

海軍は掃海作業を進めたが、相次ぐ機雷投下と装備が不備なため十分な掃海はできず、掃海作業をしていた船まで触雷する始末だった。そのため6月以降、触雷、沈没する船が増え、7月には連日のように船が触雷した。触雷は乗っていた人々の生命も奪った。また、触雷して沈没したり、座礁したりした船は航路をふさいだ。

いったん敷設された機雷は、戦争が

終わってもその機能を失わない。8月15日以降も、漁船や浚渫船などが触雷し、乗組員の生命が奪われた。20年には6隻が、22年には1隻が触雷した。その後、海上保安庁の掃海作戦を終了させたが、敗戦から27年経った昭和47年に浚渫船「海麟丸」が新潟港で触雷、沈没し、乗組員46人中2人が死亡、他の乗組員も全員が重軽傷を負った。「海麟丸」の沈没は機雷の恐怖を忘れかけていた市民に衝撃を与えた。